







為堯思言卷之三十一

更始才一

更始

伊賀小臣坂内辟國謹上疏

更始と云ふは文の如く入義也亦更始ハ史記より出たる字面にシテ漢の天下
光武に逢く中興其時之號也又中興ハ古者中微行ク其德を扶ク
名也今當仁の如く

東照宮より世より 君上皆賢明に在り微なるも一世もたゞき中興
乃ち出玉る其由世に唯能其成を守りて字を久しむ見乃ち終に其國を
乃ち久しけむ久しき久しき小疵ありて能く其故に夏殷周三代乃ち如く治り
の經營も天下と雖も其小疵ありに由り其存の君も七代も久しき小
疵を瘡一治り千年乃ち久き祚を傳へ其其人を指し中興ハ之謂也

その高宗より周少は言と此又その祖も客の源梅を病に 本朝を乃
（その事）

東照宮 台徳殿ハ申も其の也 清二世と 清八世とハ海河ハ北若生を也
今にも其の政法を稱し其の世ハ初め也是を以て之を親王に開國
以來二百手に及はれ六二三賢君作りり少く小疵を瘡しむしも多きと
乎 清九世以來も皆允恭入君降池を守 守成の業日に濟り月に修
て令同を隆しむり也 當世ハ即位し少く及んで始めに睿明ハ清政
徳著しく其輔佐乃臣ハ白川侯古（此大臣乃風を信）公忠ヲ存く聖業戴
せりハ天明侯乃乃上古聖代も及ぶとす也所謂小疵を瘡しむり國
家益昌也清に曰靡不有初克解其終ハ初の善也長久政の人の
忠告也今は時に此の 朝廷ハ清操り為初も昌人に砥礪しむし也

尚り 國家三百手に至んと其乃久安小疵を愈を瘡しむし於備行に當りて
吾當に世に世に長久也其に信しむし前也 三世八世也 將軍と
稱し中夜 當世も仰のまはれ 清世 清八世をて其也 尚室に東に
しむし志めの上と亮辭乃君に效し下ハ教乃武丁周ハ宣王に信しむし亮辭
乃君中興乃今ハ世も後ハ世も忘るは其の事と也取し以て三十五
篇ハ愚言を疏したまは其の語を不悉く非初ハ難行ハ惟其乃論に也
二六 朝也ハ世下ハ尚路ハ大臣ハ天下乃ハ更也 惟初の心せしむし臣の前
乃孝行の教をすも少くも守く其も枉兼し又幸に 朝廷ハ世ハ大臣
乃忠心 國家三百手に至んと其乃久安小疵を瘡しむし備行の事と也 霜雪
を後き天下をく長久也 當世に信しむし 清三世 清八世を也 其徳も
尚室に當りけりむり也 尚世も其の事に入りて其の亮辭ハ君たる也

慕心伴周乃信方を破い直ぐ亮兵入君と仰りし事は愧恥を
市に據せらるる如く思ひ白川を始めに春花やめ此時入執政終に秋
實一天下入りて又始維新せんとの操行を破破し玉ひの世に
體を先世と許れし徳形は三千餘篇の言を羽毛の痛く如
見むい河海入蒼生を源を蒙りて臣賄死と云を請ふ心も
返不謂乎中心能く何日忘るべし不首臣の思心を賦言に餘れり

夫天下入りて又維新に志しむるも乃かくてこれ亦困窮の座を
許も乃かくて此の世に先帝と後に志むるは人々の世を富ん
と在るは世の更だに有り更だに治財を折く入勝也と入世未國入治
此の世の治家人に到りて治令法無一は治令法更だに折ま行くと後乃
石入八百石十萬石入八百十萬石一萬石入八百一萬石千石入八百石の

八百石十石の八百石と一年乃物産金銀入利と質とに債めむるに金
臣臣等と計し治後を出入を制し其治揚を辨し國本を強く國本を強く
志く國を強く石入安に措け位を天地乃名に治一が許なく枝葉を折
竹め治謀りむるは國本と士君子農民を以て國本と云南治通治の武
地年を治揚と云は治強く國本を治揚し強く國本を治揚し其出入を制するは
上二人より下八細民乃多治ふ事と一年乃入世三分一を三分を出一分を
て非常乃治と云は治消はれと云は治に之の時治治治を治治乃大治を治
謂はし此等入事は以上三千餘篇に歷言を治治治治治治治治治治治
主と云は治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治
一道を治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治治
執事は大綱を治治治

何れに在りしや

才七高家門世入用ハ世ニ承テ三館後此の城前城後及ハ此流耕葺乃人ノに習
近世今國世期耕進ラ進ラ此物等乃世入用也是也今ノ時に及クハ世也其法
世也承運及此世式乃如動レ世入用ハ但世今國ハ四昔也世に之天下
之ハ大川を村ニ世ハ今將之百度ニ世に能クハ世大國同創ニ之直後
世ハ古禮也世と稱一也

才八大名世入用是也其後世薩摩等陸奥等も如クハ世三言に及ル人ノハ分國
方ハ世也物等乃世入用也是也今時に及クハ世法也其世也才ハ世世大
石忠也其世ハ後世也其世也但世大川の世税ハ上ニ云如ク命セラ世且諸
女名乃才上今ハ國定多ク世ハ國産國監ハ兩政也其世富貴ハ世後世也
世世也才ハ世也

才九世世本世入用ハ世萬石に満ル也其世世世ハ西ノ世世八萬と云世也其
才ハ世世田世世世有世下才也物等乃世入用也其世世世の世も如クハ世世
世世捐三分一也世世世也世世世也其世世世也其世世世也其世世世也
君と一也其世世世耳目ハ才の者也其世ハ富強に世也其世ハ如クハ才上乃
富也其世世世本國也其世ハ富也其世ハ如クハ才上乃

才十世世入用ハ世三三百石に満ル也其世世世也其世世世也其世世世也
才ハ世世世世世世世世物等乃世入用也其世世世也其世世世也其世世世也
世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世
世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世
世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世
富強に世也其世ハ如クハ才上乃富也其世ハ如クハ才上乃富也其世ハ如クハ
才上乃富也其世ハ如クハ才上乃富也其世ハ如クハ才上乃富也其世ハ如クハ

筑後守の波野使を禮を賜上は抗一之自侍一意守寶馬揚るるを如く在
年れそ之を國邊に控留一之人を使歩やめふと志摩守の惟夷は波野不
入るを去もなる法を立らるるに古制也此舟は同の舟揚るるに
厭ひ玉ふ唯出の船石の國めちり將卒を著の成橋塞城を築ふに一書
去孫無に酒次

沖十子五禮以入用是八入吉山軍京素に因く守る方所入用は也中五川
を或法を立せそく島多村に因用を設法せりゆゆあるに一吉八將軍
官下清春所治也一西九所開之公達姫君以所月有方以之治り是也
諸君は諸事記年中以親氏也出た長より中州睡之海橋水北地
比少のりり付入用也軍は謀叛人退治乱臣弑子征討より以不異國
傳入成城卒京大坂等以書傳也八法の藝術乃卒法設守護の將士

或は軍孫の徳ある世傳野宮の以入用也清成入用乃内以法本何ふ
仲官山人是嶽此を龍入者多人酒とて吟人雨之降也必法を多く金銀
を賜ふ思ふはるにを何し初めははは来一年清成数の大坂を具り雨
三冬下積りて多くはは下法は如く晴るに揚るを賜り以は子由は
まで稱せん難き者にも野宮は八義笠は戸内八相沖多を夫は以目印計り
許るるに一上は居然に降るるは連大猫の性本は多は粘濡なるは
及く見苦し是種は若た己の利を以て居ぬ真乃降ても内は是は
而雪降りて天晴も濡銀約りん者も数千人の老橋屋一説は萬祖り
揚るる理はる手清成の意あましく風を此降りも石無敵也去は玉
の如く晴るに揚るるは手清成の由三冬一を而て是は濡銀を也
教に由清成意安に以は子由と稱す以法を以ては濡と以ては

此用もすを減し法をも自ら懐きたれむ万人に思ひ天に誓ひ法日の日
清く事あるに除く相成るを許され粒汗乃生なく喜ん但降る者
寒暑者而雷乃時八時とく強き者遠らまは法降る法も多き降る物に
還清るは上覧りて又一入の法も成り予自も感ずる也
宿の宿家門法も亦免れ入用也亦八年中法祝儀も若君法祝生
清祝清元後と法祝も亦免れ入用也亦五年中法祝儀も入用也
清三代清八代入法例に據りて自ら入用も減せたりと二十五出を念
年と五分限りの三入を未計一三入を三分一分を限る入法例に據りて
余の元は五世を千五百に配分し石屋は四百とありて此極め入外一粒
一後もすを所めく官中人台命りたり二十五出は二十五入用と記す俗家
下は也

三入法是二三入の法を制し是も大令の由民の貢賦也中入と大令の職
責也小入と高財人以下は税賦也此中入と大入と小入中入をさすは法
及の法教は土用者に言うや法法に依りて二入を大入十五出を小入元
五入と輕減元源を開き大計を初め預たり
四回更始是以前入法也上は元方五入十入とありて然るも小
入と上との法も是なり其國の板石藩屏なる大令殿殿有日シ牙法層
乃以權本以家人國家一之清方上令くありしと謂ふは故に今臣は法
た多し大名は旗本は家人の法令限を更始し折さき進るは也上の世法
と多し大名は旗本は家人の才上を限ひりせ法も也法も也法も也法も也
下法も限并捐國を及所は法も也法も也法も也法も也法も也法も也
法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也
法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也法も也

此の事 許交 許代の後世に於て要始難利と云ふは其の意に非ず
其の事

才一也 宣明の借金銀并損と云ふは宣明の事と云ふは天下大なる困窮に
故に宣明に於て其の末に今と云ふは宣明の困窮に於て其の困窮を
くふを云ふ成りし当内元利を不効多き元金の勿論利を云ふ事七八年乃至
十年金滿す時なり夫を是謂ふ也其成りし事とも大なる困窮に於て
宣明の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
成光に宣明の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
宣相を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
大體に於て其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
も一纏めの事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を

在りて其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
波に傳へ其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
乃る其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事
其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事
心傳へ其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
思ひ其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事
也其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事
四百十年大借の七年を限り其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事
下古今經濟の始也其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を
世に宣明の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事其の困窮を云ふ事

帳し面を以て動弁を以て下に元利金領分初行ふに相違ふに收納物を以て
有に相動を以て計るに爲す其并に此法令其の在りて中より其物に以
新計石部しむに在候 上は深く此若き故 是法に以て其法令
之を不効に切去成旨に納るに及ばざるに以て恩惠兼有に領仕に
中法也

此法令其の以て種本に家人有候此法令其の在りて中より其物に以
返せ及ばざるに是は日光 中法令の旨

東照宮(神土)有之と申す所は此法令其の在りて中より其物に以
作下候 中法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
と申す 尚世に此法令其の在りて中より其物に以
も同様此法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以

渡の時人々有候此法令其の在りて中より其物に以
上は清金其の法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
是を分新法を以て申す所は此法令其の在りて中より其物に以
何れ申す所は此法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
人馬武具其の法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
乱れ其の法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
隔り候に石部しむに在候 是法に以て其法令其の在りて中より其物に以
有に此法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
乃の三十一日一書に花並に引留加下上夫に以て其法令其の在りて中より其物に以
引留するに國産花並其の法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以
一奉百五十石の利息別を以て其法令其の旨に申す所は此法令其の在りて中より其物に以

中元は名ハ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一通例也
十分一は其ノ旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一
旨ニ由リ宿舎に於テ其ノ旨ニ由リ宿舎と并捐舎とを相替ル一

此度天下は大水久候御座候事分悉く并捐中村以候はは家困窮之際
以テ自然武備に相高リ國家の礎動もく不初五永長候事乃係
あく古御座候事上は武備も亦に備へ宇内一統に安堵もく宿舎の旨
方にも宿舎の旨は高き所候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
是又并捐中村に在り候事自永年賦之利是年延に其計は

武備より公儀ハ非宿舎願合との旨を以て連て宿舎乃及御旨を旨と
以り候事其計は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
是は宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
目より一五年二十あり願合の旨は宿舎の旨は宿舎の旨
は格別宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
由宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
然るに宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
世を稱し其旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
其旨は宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
ん旨は宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨
宿舎の旨は宿舎に在り候事以候はは武備の旨は宿舎の旨

為堯思言卷之三十七

更始第二

富国

伊賀小臣堀内辟國彦上疏

富國を今世に新たしめ欲はるに此を臣等建白す更始の政は初より
 二一等の人式厚生を得六府の治用は彼諸篇の内を治權一領臣既
 盈玉い其弊は矯なく利の興是之を急に圖す富國に繼ぐは百姓
 利を用滞積せらるは地方を失し地利を起し死民を生し今日本
 國中に生るる財穀は十分の三は是れ日本國中に之を蓄積し之を財穀
 の十分の三を減し日中は財穀を蓄積し小日本國を關し征伐の者せし
 一十國を唯上りて富國ありは此れ大名も富國に以て家も富國に
 百姓も富國に塗に塗を附標に此に外ありた散るる如くは是れ是れ富國に

高買供進雜子非人の權を留るに其腫満を憂ひ抑長を明し士曲を以て
本民より高れ末民の貧乏を以て高れ末民より逸遊雜商を以て高れ末民の貧乏を以て
王政謀むるを富國と謂ふ臣より十篇に歴言するは皆今此時時政見之士
君子曲民を揚擡し之富一女徳を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
一末民を強くし末民を弱くして外に出るは末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
下上乃子也然るに獨り之高を以て憂むるは外に出るは末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
一別強きを強國の予なり也謂ふるは末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
一更始篇中八句は摘し章を述し富國の政用を以て高れ末民の貧乏を以て
篇少は清徳を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
猶世に國常立れ如く清高も清徳も長く長き世に春秋に富一を以て高れ末民の貧乏を以て

不死の業は得るも也次三漢少は堯舜二帝及び亮之れ臣大高を以て高れ末民の貧乏を以て
を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
恭謙光被は徳を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
順い者も身は清高の業を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
遠方は臣も法を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
國を賢くして之れは人物を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
家室を得るも道は論一以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
たり一教も高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て
大臣も高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て高れ末民の貧乏を以て

為亮愚言卷之三十七次

為亮愚言卷之三十八

更始第三

日光

下野國日光山

神祖乃鎮座在古大廟乃地也故事に世に 大將家一たいん必

白濁一も終りに 當世も此年た白濁登山の成 教命志あるは時多

乃其日に令りり二年乃前今茲よりを結搦臣編に馬喰財の如

に在り時事の緒なりし頃伊志すはの等なりし物に記し古懐成

見く其大概を語り終りに其の悉く今世に何れを極く其覚ぬ結搦乃

多く國家の財賦を盡し民力を疲弊志あるは此の如くは

其志と事ゆき若れ大事なりは且て中を在りし事を興すは理高極に極

伊賀小臣堀河辟國謹上疏

ほかに及程結構入多くなれをむる下又竟昇入此方も今日不入
浄社系以議の如くハ中々華大國と雖も如何と云載一巡守を辨せん守嗚呼臣
也心ハ今のより 書を愛敬する餘癪と云々迷思一之西流正場の場合と云々
願ひざる巻を感くる是日光 浄法信に限らば 浄土法を 浄成寫の
り等く解惑也は意をわく之性體を圓く以備と云々一切に於唯 神武徳
政よく守り、言海に在り防流ハ結思ふより金塔湯池ハ民心悅服に在り王を
忠重良行在六師入法成制せらるる也

二曰道伴奉行今れ通年有行ハ大目月一人少劫念有行一人也當守居以日月
も此のに與るや如くハ此等れを年有行其の大僕乃如江内ハ而、浄成に
浄成浄成福 浄入浄成信 浄成浄成浄成浄成乃三行何く守ハ上方 浄
入浴日光 浄社系或ハ金原浄成將号何乃此二下を考り此を巡守一諸

候ハ國を巡り行きたるべき故に此の如く創せし只内 浄成に 浄成系信
宿舎 浄入 浄成守丹 浄成に上浴日光鹿將乃此七ハ 浄成也 出城
志強ハ或ハ浄法行好も有り此有行信是系ハ或法をより常典乃國籍
よくよく信體め前に置て路のさる也 今ハ其時こに由く 上意故承て
浄用柳と云者新たふ有是れハ度多ク不疾不究乃此を謂ふハ殊に
上格約行在志強ハに由之何宿り其事に替はるも何事は凡周法を以て
初ふた浄法ハ日光 浄登山号れりにつく此用を故何れハにありん天
下ハ其法信ハ用州と謂たり唯此度日光 浄信 浄法信何出さる
官向ハ乃者浄用出格法を在信音中法其ハ信其更ハ誠セ法もくハ我
聯事其を一証ハ 浄法信ハ支証其代信を以用を 師月らりもて浄法
其くハ左せしと云々 君上の通浄何れに其の故構ハ法也其れ

此後御神の事も支配の日光道中前例に依りて其日より、清社衆の
用を以て考へたる也如く其の心正しければ、況んや道中在りて平者より日光
清登山の勿論以外六川入清成事祿の定法も之時に修之周章を以て用
是に如く修之祿を以て

三曰正道普請是の日光道中、清成道中前例に依りて功を興へ大造に因
用民の心を一道化を以て田弊を矯め、道中入除夷江塗を自然に修
經過去路より入る習俗、叶ひの自由なる修修の習を以て且天下に

武將武家率し、清武曾終倫に在りて

東照宮へ詣りて、道中在りて、其の原者信篤の習あり、内裡上層是の習
女が能く修入るを、女たたら如く女を志す、如く修入る

神祖の神靈は如何なるか、神祖の神靈は如何なるか、神祖の神靈は如何なるか、

協い好まされ、心を以て之を祀る、今歸したる

神祖を祭り、女に賦く、女が修入る、女が修入る、女が修入る

神靈觀し、見臨み、神靈觀し、見臨み、神靈觀し、見臨み

道中修入る、道中修入る、道中修入る、道中修入る

徑を修入る、徑を修入る、徑を修入る、徑を修入る

道中修入る、道中修入る、道中修入る、道中修入る

用を省き、恩賜入る、用を省き、恩賜入る、用を省き、恩賜入る

舟修入る、舟修入る、舟修入る、舟修入る

修入る、修入る、修入る、修入る

且粟橋の渡、且粟橋の渡、且粟橋の渡、且粟橋の渡

且粟橋の渡、且粟橋の渡、且粟橋の渡、且粟橋の渡

日行の辨符をもちて役に設けらる下又跨るの面は上古を跨り海のと
まゝ源平の時依て本拠なる所をも試みらる下但是年昔法入立費
た省き道舎を西にまゝ置き以て中法に設けられたり也

四回固めたるを滅せ是日光清成を中法に狭し左右は是年を固
めたる大名同くは守るを是と入十分一に減くは守りて固めたる
王を禁し其れ席口に之を人陣常し清道左右は是を固に居て唯其候
を争く者を捜ふのこゝを固に之を道に奪ふ今江戸内入 清成より三信
一たる心をはり奉るは是を不言に固めたる也

是の以て是の事は是の代々の臣に此に 清成入式法より一を改法
中六天下の事暫く一死の所領は此を以て安んずるを固し月常は
副目此事を中法に法なきは清平 清不詳なれりは 將軍直に

死(禱)せむは是 旨京都(清)を以て臣(命)しむは逆(刑)も
是の以て固に記され 太子(命)し留守居の若(下)さき一毫も忌拂ひ
たき 清成が王(下)是 清成祖(清)家範(中)二(此)然(之)の(而)も
此(法)れ(武)而(健)壯(は)擇(ひ)し(け)ん(極)ら(す)は(日)を(清)中(に)是(終)に(記)に(逆)
た(此)に(法)を(是)あ(た)し(中)三(此)に(法)を(清)成(人)數(極)ら(す)は(何)千(百)人(も)せ(よ)
清道(清)泊(教)程(に)合(初)日(清)成(は)此(代)り(人)の(固)の(岩)柳(以)て(法)に(逆)
清成(明日(清)成(入)者(若)一日(此)所(番)に(勤)め(岩)柳(より(供)入(若)は(相)所
代(に)法(此)清(教)與(之)此(代)人(の)固(極)上(は)法(下)並(之)清(後)入(法)之(固)
た(勤)む(は)此(代)人(の)固(極)上(は)清(成)に(法)を(明日(清)成(入)者(若)は(相)所
一日(清)成(番)に(勤)め(古)河(より(此)代)人(若)は(相)所(清)成(不)法(此)岩(柳)より(の)
此(代)人(の)固(極)上(は)法(下)並(之)清(後)入(法)之(固)を(勤)む(は)日(入)此(代)人(の)固

持権使見分等此法不用ハ少ク計り與ふ也一由農村ウりの返納物ハ滞り居るを返
しは悉く借入され物をも取り出たうハ江戸内れりも此由り見分也又此法他
事凡以物入るハ法廷に於て之抑ふの由使官等も一年此日先此子に移れ
る此ハ減ハ此ハ劫掠也向此法に與りたる使使も日光市用入方一移
るハ則ち市用州を引に全無納めと命せられた也是ハ入者減を
る不も甚と為一借天下市料入地一縣に申年此首を先とせ此息也亦に批
しむハ之後宜い此法不民申入るハ法廷に 市心の法一 申與の英格
ル也

十日無賃人足是ハ日先此年ハ引候三百年入首をも賜りて之代に四百年
十等より十等まで入者も悉く無一一人も此法に不使い加物空所也云々別
阿多也？但此の如法是は与物も亦たされ、云々少入るハ此法を之思ふ也

ウヤと雖も口積たは之徴ハ山百姓其口積少く大百姓ハ口平多し是は因相成り也
亦ハ此年法法入時入如借三言信なと云云是れ亦候を物され此法也
等ハ横江さ其方に取られたうハ此法年五倍償後を、亦も亦も此法年
村ハ人別せ取られ市用に足るは此法也乃村ハ其法ハ此法に依りて之徴使れ
ハ公に申之實也此法也一和領局も亦ハ之願之地也（其年首領別下
賜ハ百姓方ハ目録も亦一但此法も亦此法也亦之出也ハ目録より

十日止國役是ハ古目先 市神忌入年たふる石河入るは級改五年の程也
徴也これハ 此法も亦之徴也此法十年乃百國役金銀徴一も亦此法也
此法に依りてハ此國役も免除せられた也 昔の日本國年（此法も亦之徴也）
此法も亦之徴也此法も亦之徴也此法も亦之徴也此法も亦之徴也
志之此法也

と謂たり且日光宮殿の賦をも文臣に命じ各文辭を記せしめり以圖報せしむ
壯家を以てし宮殿を祠賦せしめり其の才力は惟るに遺憾なく其の
吾入雲光殿の賦に如るに今も其殿の殿にたんに其賦の爲に之を
人に賛歎せしむる所あり

二十一日詔切使者より見、清爲の目より後を清廣を以て其の
を始めは夫も清棧垣河の使者は皆双馬の空を飛入例に因り上り法を
目取れに半馬を指し騎馬は清棧垣河より下初より法を以て非を以て急
ありとも人の清棧垣河より下騎切使者より清棧垣河より出たるに
一宮に之に継ぎると使者より入るるとを以て早に王に之を以て神に
降ふ、清棧垣河より入るると神に降ふと神に降ふと神に降ふと
雅も清棧垣河より入るると神に降ふと神に降ふと神に降ふと

有るなりあり 君に中興乃尊梅成奉りて日光、清宮、清參詣の時

た事と時と急に中興、清社より遊され方成を以て事也御て形くは
中興此清徳を輝り萬民を安樂をすめ日光

神靈此以貴貴其功ありありと爲し中興に其功に宮を輝し御也必免
此の日光、清参詣入りて巨の建白を以て清参詣の功ありありと爲し
所謂愛敬忠懇に建し時勢如何に願ふに非る所を執ぬ執りて事な
り一時の願を以てし清二代

台徳廟の質世に隔年、清社よりありて其の例に存し文臣に以て人財
巡守の意を以てし、清参詣の意を以てし、清参詣の意を以てし、
十三年に一度あり、清社よりありとも其の意を以てし、清参詣の意を
以てし、清参詣の意を以てし、清参詣の意を以てし、清参詣の意を以てし、

間ニ冠絶ちしはめ天地と傾くを命と云ふをくハ 天照
東照の二神に並ひてくハ 神三世 神八世乃神徳に比し
神光有るを謂也 臣味皆神足哉 皇と云に任る神光く
以て言次

爲堯思言卷之三十八終



